

LGBTQ教育が中学生に与える効果についての研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大門, 耕平, 藤井, 航, 池田, 恵美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000291

LGBTQ 教育が中学生に与える 効果についての研究

大 門 耕 平*・藤 井 航**・池 田 恵美子***

1. はじめに

1.1. LGBTQ 教育の必要性

近年、LGBTQ に関する理解が社会のみならず、教育現場でも求められている。2023 年 6 月 23 日には、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解を深めることを目的として、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」（『官報』号外第 132 号 法律第六十八号 令和 5 年 6 月 23 日）¹が成立し、公布されている。LGBTQ とは、LGBT に Questioning（クエスチョニング）、Queer（クィア）を付記したものであり、性的指向や性自認が明確でないことを示す言葉である。なお、LGBT とは、「L がレズビアン（Lesbian 女性同性愛者）、G がゲイ（Gay 男性同性愛者）、B がバイセクシャル（Bisexual 両性愛者）、T がトランスジェンダー（Transgender 身体的性別と性自認が一致しない人）、それぞれ四つの性的なマイノリティの頭文字をとった総称で、性の多様性を表す言葉」（文部科学省 2022）²である。

これまでに、文部科学省（2015）³は、2015 年 4 月 30 日に「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を通知している。この通知では、「学校において適切に対応ができるよう、必要な情報提供を行うことを含め指導・助言」を実現するために「性同一性障害に係る児童生徒についてのきめ細かな対応の実施に当たっての具体的な配慮事項」などが提示されている。また、令和 4 年に改訂された生徒指導提要（文部科学省 2022）には、「第 12 章 性に関する課題」において、4 節に「性的マイノリティ」に関する課題と対応」が新たに追加され、「性同一性障害に係る児童生徒については、学校生活を送る上で特別の支援が必要な場合があることから、個別の事案に応じ、児童生徒の心情等に配慮した対応を送ることが求められています。」と理解と支援が必要であるこ

東北学院大学文学部*・関西学院高等部**・近江兄弟社中学校***

1 国立印刷局 2023 官報

<https://www8.cao.go.jp/rikaizoshin/law/pdf/jobun.pdf>（閲覧日 2024 年 3 月 24 日）

2 文部科学省 2022 生徒指導提要

https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf（閲覧日 2024 年 3 月 24 日）

3 文部科学省 2015 性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm（閲覧日 2024 年 3 月 24 日）

とが明記されている。

この背景には、LGBTQ 当事者に対する周囲の無理解によるいじめ被害の多さがある。日本における調査として、ホワイトトリボンキャンペーン (2014)⁴ は、「LGBT の学校生活に関する実態調査 (2013) 結果報告書」において、10 歳から 25 歳の LGBTQ 当事者を対象として、全回答者 (609 名) の 68% が「身体的暴力」、「言葉による暴力」、「性的な暴力」、「無視・仲間はずれ」のいずれかを経験したことがあること、84% が LGBTQ についての不快な冗談を言ったり、からかったりした場面に遭遇していることを報告している。また、そのほかの調査においても、LGBT 当事者の自殺傾向の高さやいじめ被害経験があることが報告されている (Hidaka ら 2008, 中塚 2011)⁵。そして、アメリカにおいては、LGBTQ 当事者の状況を明らかにした調査として、Kosciw et al. (2021)⁶ が、アメリカにおける LGBTQ 当事者が学校で直面する差別、いじめ、ハラスメントの経験の多さについて報告している。その中で、LGBTQ に関する教育カリキュラムを持つ学校と持たない学校との比較をしており、カリキュラムがある学校においては、カリキュラムを持たない学校と比較して、差別的な言葉や侮辱的な言葉の頻度が低いことを示している。さらに、カリキュラムがある学校は、他者からの攻撃を受けることや自殺を考えることが低いことを示しており、学校における LGBTQ に関する教育活動の重要性を示している。このようなことから、LGBTQ 当事者への対応として、LGBTQ 当事者への学校での支援が必要であり、また、そのためには、教師、および、生徒への LGBTQ 教育の実施が必要である。

ただし、文部科学省の「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」は、教職員への研修、学校としての支援体制に主眼が置かれているものであり、児童生徒への教育についてはほとんど提示されていない。また、学習指導要領にも記載がない。セクシャルマイノリティに関する理解においては、支援体制の実現も重要であるが、児童生徒への教育も不可欠なものである。しかしながら、日高 (2015)⁷ は、LGBT に関す

4 いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーン, 平成二五年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業 2014 LGBTQ の学校生活に関する実態調査 (2013) 結果報告書 [https://jimdo-storage.global.ssl.fastly.net/file/7cb85d4e-5fa0-4e43-8217-1750d7db3fa1/LGBT の学校生活に関する実態調査 \(2013\) 結果報告書.pdf](https://jimdo-storage.global.ssl.fastly.net/file/7cb85d4e-5fa0-4e43-8217-1750d7db3fa1/LGBT%20の%20学校%20生活%20に関する%20実態%20調査%20(2013)%20結果%20報告%20書.pdf) (閲覧日 2024 年 3 月 24 日)

5 Hidaka Y, Operario D, Takenaka M, Omori S, Ichikawa S, Shirasaka T. Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan. Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol. 2008 ; 43 (9) : 752-757.

中塚幹也 (2011). 自殺総合対策大綱改正に向けての要望書 Retrieved from /<https://www.okayama-u.ac.jp/user/jsgid/jisatsusogotaisakutaihou%20teigen%20111012.pdf> (閲覧日 2024 年 3 月 24 日)

6 Kosciw, J.G., Clark, C.M., & Menard, L. 2022. The 2021 National School Climate Survey: The experiences of LGBTQ+youth in our nation's schools. New York : GLSEN

7 日高康晴 2013 教員 5,979 人の LGBT 意識調査レポート (PDF) <https://www.health-ssue.jp/kyo-u-intyousa201511.pdf> (閲覧日 2024 年 3 月 24 日)

る教職員に対する質問紙調査により、教育の現場での実践についての調査を行い、その教育の実施の少なさを指摘している。調査によって示されたことは、「同性愛について教える必要があると思う」が74.7%であり、「性別違和や性同一性障害について教える必要があると思う」が85.7%であり、教育の必要性が認識されていることである。しかし、実際に授業に取り入れた割合は14～15%程度であることが指摘されており、教育現場での実践については、実施が遅れていることが示されている。

1.2. 先行研究

LGBTQ に関する教育現場での研修や教育実践の効果については、いくつかの報告がなされている。渡邊(2019)⁸は、公立高校の教員を対象として、LGBT に関する正しい知識や、実際の LGBT の当事者のライフストーリーを通じた研修を実施し、事前事後アンケートの結果から LGBT に関する誤解や偏見を持っていた教員、あるいは、「どちらとも言えない」と回答した教員の75%の誤解や偏見を修正することができたと報告している。また、佐々木(2018)⁹は、中学生を対象として性的指向や性同一性をはじめとする性の諸要素の多様性を授業で扱い、授業前後で授業実施群と授業未実施群とを比較し、授業実施群が授業未実施群と比較して有意に嫌悪得点が低かったことを報告している。

また、LGBT 当事者との接触の経験の有無が、偏見などに影響を与えることの検証がされており、釜野(2017)¹⁰は、同性愛・両性愛フォビア度において、セクシャルマイノリティが周りにいるか否かの変数が有意な影響を与えていることを明らかにしており、周りに「いない」場合が、「いる」場合と比較してフォビア度が高いことを明らかにしている。そして、佐々木(2016)¹¹では、大学生および成人を対象として男性同性愛当事者による講演を実施し、イメージの変容につながるかどうかの検討を行い、同性愛に関して正しい理解を求める態度が向上していることを報告している。

しかし、これらの研究においては、LGBTQ 当事者による授業実践により、中学生の意識がどのような変化を与えることができるかが明らかになっていない。また、授業効果について、再現性を確認したものはほとんど報告されていない。そこで、この研究では、

8 渡邊歩 2019 LGBT に関する教員研修を通じた高校教師の意識の変化 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 26号-2

9 佐々木掌子 2018 中学校における「性の多様性」授業の教育効果 教育心理学研究 66, 313-326

10 釜野さおり 2017 同性愛・両性愛についての意識と家族・ジェンダーについての意識の規定要因-性的マイノリティについての意識: 2015 年全国調査から一家族社会学研究 29(2), 200-215

11 佐々木直美 2016 大学生および成人を対象とした男性同性愛者に対する意識について—当事者による講演会の参加前後の比較から—山口県立大学学術情報 第9号 [看護栄養学部紀要 通巻9号], 33-40

LGBTQ 当事者による中学生に対する授業実践を行うこととする。そして、再現性を確認するために、2 度の教育実践を行う。

1.3. LGBTQ 教育内容

LGBTQ 教育を実践するにあたり、教育の指標として、文部科学省(2015)¹²を参考とする。そこでは、「道德教育・道德科を通じて育成すべき資質・能力について」において、育成すべき資質・能力が以下の三つの柱として提示されている。

- i) 「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」
- ii) 「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」
- iii) 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」

そこで、授業の内容及び質問紙調査については、上記の 3 つの柱を意識し、知識教育、価値観教育、行動意志教育の 3 つの項目を作成した。

1. 知識教育

知識教育においては、「思い込みを知るクイズ」, 「セクシャリティの 4 要素（身体の性、性自認、性的指向、性表現）について」, 「セクシャリティの考え方（LGBTQHC, SOGI, ノンバイナリー（型にはめない性のあり方）について」の項目の順に行う。主に現在のセクシャリティを考える上で重要となるキーワードを中心に、考え方のポイントや混乱しやすい点などを丁寧に伝えながら正しい知識を得られるよう構成する。

2. 価値観教育

LGBTQ 当事者の視点からライフストーリーを語る。実際に LGBTQ 当事者として生きている講師の話を開く事で、生徒の価値観に対してアプローチし、身近にいるという事、また出会いを通して自らの性について考える機会を創出する。

3. 行動意志教育

現在の LGBTQ に関する日本国内での当事者の割合など、いくつかの例を用いて具体的に伝え、その数字から「より身近にいる」という視点を意識付けし、社会問題となっている事柄も併せて伝える。こうした情報を得た中で、生徒に「今も出会っているかもしれない」, 「これから出会うかもしれない」という視点を持つこと、また「様々な人が生きやすい社会をどうしたらつくれるのか」という問いを持つことを促す。

授業の構成を表 1 に示す。

12 文部科学省 2015 教育課程企画特別会 論点整理

表 1. 授業の構成

授業の流れ 45 分～50 分

項 目	時間	主な内容
基礎知識	15 分	思い込みを知るクイズ（ジェンダー）、セクシャリティの4要素（身体性、性自認、性的指向、性表現）、セクシャリティの考え方（LGBTQHC, SOGI, ノンバイナリー：型にはめない性の在り方）
ライフストーリー	20～25 分	トランスジェンダー当事者の学生期～現在までの体験、当事者として生きる中で思い、感じること
LGBTQ の現状、まとめ	10 分	LGBTQ に関するデータ（比較例：AB 型、左利き、都道府県人口、名字など）全体のまとめ（性をどう考えていくか、多様な性のかたちについて）

1.4. 研究の目的

そこで、この研究では、LGBTQ 当事者による中学生に対する授業実践を通じて、中学生の意識がどのように変わるかを、LGBTQ に関する事前事後アンケート調査から分析し、考察することを目的とする。また、アンケートの結果から、中学生の LGBTQ に対する意識の実態や LGBTQ 当事者による授業実践の効果について検討する。

2. 方法

2.1. 調査対象者、および、倫理的配慮

近畿圏の私立中学校中学3年生を対象とした。授業及びアンケート調査については1年の間隔を空けて2回（2019年、2020年）実施した。対象生徒については、1回目は144名、2回目は104名であった。

授業は、年間カリキュラムにある性教育（全2時間）のうち1時間（50分）を利用して実施した。調査については、学校長に研究の趣旨および目的、プライバシーの保護、アンケートの項目について説明し、了承を得た。そして、保護者への授業実施の通知をし、実施した。生徒については、目的や方法、未回答でも不利益がないことを説明し、アンケートの提出をもって同意とした。アンケート用紙は教師が配布し、即時に回答を回収した。アンケートにおいては、特定の個人を識別できる情報（氏名、生年月日、住所、電話番号、学生番号、パスポート番号、顔写真等）は収集していない。

2.2. 授業の実施

「性教育」のカリキュラムとして、LGBTQ について学ぶ授業（50分）を実施した。

2.3. アンケート調査

LGBTQ に関する意識調査のほか、知識、価値観、行動意志についてのアンケートを作成し、授業の事前・事後に実施した。事前・事後アンケート内容は知識：「セクシャルマイノリティの人たちの人口は少ないと思う」、「性というのは、男性と女性の2つだけである」、「ゲイ（男性が好きな男性）は、女性になりたいと思っている」、価値観：「仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある」、行動意志：セクシャルマイノリティについて知る必要はあると思う」、「あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい」であり、選択肢は、4件法で、「そう思わない」（1点）、「どちらかといえばそう思わない」（2点）、「どちらかといえばそう思う」（3点）、そう思う」（4点）とし、それぞれ点数を算出した。

2.4. 分析方法

アンケート調査の結果より、クロス集計表を作成し、 χ^2 乗検定を実施した。また、事前事後の有意差検定として、t検定を実施した。分析は、SPSS23.0を使用した。

3. 結果

3.1. LGBTQ 教育についての生徒の評価

LGBTQ に関する教育を受けた生徒が授業をどのように評価したかについて検討するため、「今日話を聞いて、多様な性のあり方について知ることができた」、「多様な性について学ぶことを通じて、自分自身の性について考えることができた」、「今後、セクシャルマイノリティの事を知らない人に出会った時、性の多様性について伝えていきたいと思う」、「また多様な性に関する授業や話を聞いてみたい」という調査を行い、その結果を表2に示した。その結果、1回目、および、2回目とも、どの質問に対しても肯定的な回答である「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」の合計が、85%を超える値であった。

3.2. LGBTQ に関する理解度についての事前アンケート

LGBTQ に関する意識調査についてクロス集計表を作成した。表3に「セクシャルマイノリティについてどのくらい知っていますか」についての結果を示した。その結果、「聞いたことがない」が15.4%（合計）、「聞いたことはあるが、具体的に詳しくは知らない」が58.1%（合計）であり、合計すると73.5%が「聞いたことがない」、または、「聞いたことはあるが、具体的には詳しくは知らない」と回答した。また、1回目と2回目のアンケート

表 2. LGBTQ 教育についての生徒の評価

	そう思わない	どちらかといえば そう思わない	どちらかといえば そう思う	そう思う	合計
今日の話を聞いて、多様な性のあり方について知ることができた。					
1 回目	2(1.4%)	1(0.7%)	19(13.5%)	119(84.4%)	141(100%)
2 回目	0(0%)	0(0%)	6(5.6%)	101(94.4%)	107(100%)
合計	2(0.8%)	1(0.4%)	25(10.1%)	220(88.7%)	248(100%)
多様な性について学ぶことを通じて、自分自身の性について考えることができた					
1 回目	6(4.2%)	8(5.6%)	57(40.1%)	71(50%)	142(100%)
2 回目	0(0%)	0(0%)	19(17.8%)	88(82.2%)	107(100%)
合計	6(2.4%)	8(3.2%)	76(30.5%)	159(63.9%)	249(100%)
今後、セクシャルマイノリティの事を知らない人に会った時、性の多様性について伝えていきたいと思う					
1 回目	2(1.4%)	9(6.3%)	69(48.3%)	63(44.1%)	142(100%)
2 回目	2(1.9%)	5(4.7%)	30(28%)	70(65.4%)	107(100%)
合計	4(1.6%)	14(5.6%)	99(39.6%)	133(53.2%)	249(100%)
また多様な性に関する授業や話を聞いてみたい					
1 回目	4(2.8%)	15(10.6%)	82(57.7%)	41(28.9%)	142(100%)
2 回目	4(3.7%)	5(4.7%)	31(29%)	67(62.6%)	107(100%)
合計	8(3.2%)	20(8%)	113(45.4%)	108(43.4%)	249(100%)

実数（パーセント）

表 3. LGBTQ に関する理解度についての事前アンケート

セクシャルマイノリティについてどのくらい知っていますか。

	聞いたことがない	聞いたことはあるが、具体的に詳しくは知らない	セクシャルマイノリティという言葉や意味は説明できる	セクシャルマイノリティについて深く関心があり、良く知っている	合 計
1 回目	15(10.6%)21.9▽	96(67.6%)82.5▲	27(19%)32.3	4(2.8%)5.2	142(100%)142
調整済み残差	-2.5	3.5	-1.6	-0.8	
2 回目	23(22.1%)16.1▲	47(45.2%)60.5▽	29(27.9%)23.7	5(4.8%)3.8	104(100%)104
調整済み残差	2.5	-3.5	1.6	0.8	
合計	38(15.4%)38	143(58.1%)143	56(22.8%)56	9(3.7%)9	246(100%)246

実数（パーセント）期待度数

▲有意に多い、▽有意に少ない、残差分析：p<0.05)

ト結果に再現性があるかを確認するため、 χ^2 乗検定を行った。その結果、1回目と2回目では異なる傾向 ($\chi^2=13.099$, $df=3$, $p<.004$) が認められ、残差分析によって、「聞いたことがない」と答えた割合において、2回目が1回目と比較して有意に多い傾向が見られた。また、「聞いたことはあるが、具体的に詳しくは知らない」において、1回目が2回目と比較して有意に多い傾向が見られた。ただし、「セクシャルマイノリティという言葉や意味は説明できる」および「セクシャルマイノリティについて深く関心があり、良く知っている」というセクシャルマイノリティについての理解がある回答については有意な差が見られなかった。

表4に「セクシャルマイノリティについて学外で聞いたことがありますか」についての結果を示した。その結果、「ある」が49.4% (合計), 「ない」が50.6% (合計) と回答した。また、1回目と2回目のアンケート結果に再現性があるかを確認するため、 χ^2 乗検定を行った。その結果、1回目と2回目では異なる傾向 ($\chi^2=0.027$, $df=1$, $n.s.$) が認められず、再現性があることが確認できた。

また、「ある」と答えた生徒に対して、「どこで見聞きましたか」という質問に対する回答を表5に示した。その結果、「テレビ」が46.8% (合計), 「インターネット」が29.5% (合計), 「本・漫画」が14.7% (合計), 「友人・知人」が8.9% (合計) と回答した。また、1回目と2回目のアンケート結果に再現性があるかを確認するため、 χ^2 乗検定を行った。その結果、1回目と2回目では異なる傾向 ($\chi^2=3.658$, $df=3$, $n.s.$) が認められず、再現性があることが確認できた。

表6に、侮辱語である「ホモ、レズ、オカマ、オナベという言葉が学校内で聞いたことがありますか」についての結果を示した。その結果、「ある」が83.7% (合計), 「ない」が16.3% (合計) と回答した。また、1回目と2回目のアンケート結果に再現性があるかを確認するため、 χ^2 乗検定を行った。その結果、1回目と2回目では異なる傾向 ($\chi^2=12.240$,

表4. セクシャルマイノリティについて学外で聞いたことがありますか

セクシャルマイノリティについて学外で聞いたことがありますか			
	ある	ない	合計
1回目	70(49%) 70.6	73(51%) 72.4	143(100%) 143
調整済み残差	-0.2	0.2	
2回目	52(50%) 51.4	52(50%) 52.6	104(100%) 104
調整済み残差	0.2	-0.2	
合計	122(49.4%) 122	125(50.6%) 125	246(100%) 246

実数(パーセント) 期待度数

表 5. どこで見聞きましたか

どこで見聞きましたか					
	テレビ	インターネット	本・漫画	友人・知人	合計
1 回目	56(49.1%)53.4	28(24.6%)33.6	18(15.8%)16.8	12(10.5%)10.2	114(100%)114
調整済み残差	0.8	-1.8	0.5	0.9	
2 回目	33(43.4%)35.6	28(36.8%)22.4	10(13.2%)11.2	5(6.6%)6.8	76(100%)76
調整済み残差	-0.8	1.8	-0.5	-0.9	
合計	89(46.8%)89	56(29.5%)56	28(14.7%)28	18(8.9%)17	190(100%)190

実数（パーセント）期待度数

表 6. ホモ、レズ、オカマ、オナベという言葉を学校内で聞いたことがありますか

ホモ、レズ、オカマ、オナベという言葉を学校内で聞いたことがありますか			
	ある	ない	合計
1 回目	127(90.7%)117.2▲	13(9.3%)22.8▽	140(100%)140
調整済み残差	3.5	-3.5	
2 回目	73(73.7%)82.8▽	26(26.3%)16.2▲	99(100%)99
調整済み残差	-3.5	3.5	
合計	200(83.7%)200	39(16.3%)39	239(100%)239

実数（パーセント）期待度数

▲有意に多い、▽有意に少ない、残差分析： $p<0.05$)

df=1, $p<.000$) が認められ、残差分析によって、「ある」と答えた割合において、1 回目が 2 回目と比較して有意に多い傾向が見られた。ただし、「ある」については、1 回目が 90.7% であり、2 回目が 73.7% であり、両方とも 70% を超える回答であった。

3.3. LGBTQ についての現状把握

LGBTQ についての現状の傾向を把握するため、事前アンケート調査を実施し、単純集計を実施した。その結果を表 7 に示した。アンケート調査からは、まず、「セクシャルマイノリティの人たちの人口は少ないと思う」については、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の合計が 68.1%（全体）であった。次に、「性というのは、男性と女性の 2 つだけである」については、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の合計が 43.5%（全体）であった。次に、「仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある」については、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の合計が 31.2%（全体）であった。次に、「ゲイ（男性が好きな男性）は、女性になりたいと思っている」については、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の合計が 22.8%（全体）であった。次に、「セクシャ

表 7. LGBTQ についての現状把握

	そう思わない	どちらかといえば そう思わない	どちらかといえば そう思う	そう思う
セクシャルマイノリティの人たちの人口は少ないと思う				
1 回目	14(9.7%)	23(16%)	77(53.5%)	30(20.8%)
2 回目	12(11.5%)	30(28.8%)	47(45.2%)	15(14.4%)
合計	26(10.5%)	53(21.4%)	124(50%)	45(18.1%)
性というのは、男性と女性の 2 つだけである				
1 回目	32(22.2%)	40(27.8%)	47(32.6%)	25(17.4%)
2 回目	48(46.2%)	20(19.2%)	18(17.3%)	18(17.3%)
合計	80(32.3%)	60(24.2%)	65(26.2%)	43(17.3%)
仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある				
1 回目	46(32.2%)	50(35%)	38(26.6%)	9(6.3%)
2 回目	37(35.6%)	37(35.6%)	23(22.1%)	7(6.7%)
合計	83(33.6%)	87(35.2%)	61(24.7%)	16(6.5%)
ゲイ(男性が好きな男性)は、女性になりたいと思っている				
1 回目	68(47.9%)	42(29.6%)	23(16.2%)	9(6.3%)
2 回目	43(41.3%)	37(35.6%)	17(16.3%)	7(6.7%)
合計	111(45.1%)	79(32.1%)	40(16.3%)	16(6.5%)
セクシャルマイノリティについて知る必要はあると思う				
1 回目	2(1.4%)	7(4.9%)	63(43.8%)	72(50%)
2 回目	7(6.5%)	2(1.9%)	35(32.7%)	63(58.9%)
合計	9(3.6%)	9(3.6%)	98(39%)	135(53.8%)
あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい				
1 回目	2(1.4%)	4(2.8%)	29(20.1%)	109(75.7%)
2 回目	4(3.8%)	1(1%)	13(12.5%)	86(82.7%)
合計	6(2.4%)	5(2%)	42(16.9%)	195(78.6%)

実数(パーセント)

ルマイノリティについて知る必要はあると思う」については、「どちらかといえばそう思う」,「そう思う」の合計が 92.8%（全体）であった。そして,「あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい」については,「どちらかといえばそう思う」,「そう思う」の合計が 95.5%（全体）であった。

3.4. 中学生に対する LGBTQ 教育の効果の検証

LGBTQ 教育が中学生の LGBTQ に関する意識にどのような効果があったかを検討するため、知識、価値観、行動意志の3つの項目について、事前・事後アンケートの結果について、対応のある t 検定を実施し、その結果を表 8 に示した。なお、知識については、「セクシャルマイノリティの人たちの人口は少ないと思う」、「性というのは、男性と女性の2つだけである」、「ゲイ（男性）は、女性になりたいと思っている」とし、価値観については、「仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある」とし、行動意志については、「セクシャルマイノリティについて知る必要はあると思う」、「あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい」とした。

その結果、知識、価値観、行動意志のすべての項目において、1 回目、2 回目とも事後アンケートが事前アンケートと比較して、有意に良い傾向に変化しており、再現性が確認できたといえる。そして、全体としても、事後アンケートの結果が事前アンケートの結果と比較して有意に良い傾向への変化が示された。

全体に注目すると、知識の項目においては、「セクシャルマイノリティの人たちの人口は少ないと思う」($t=16.32, df=246, p<.01$)、「性というのは、男性と女性の2つだけである」($t=13.15, df=245, p<0.01$)、「ゲイ（男性が好き男性）は、女性になりたいと思っている」($t=3.27, df=244, p<.01$)、であり、知識について事後アンケートが事前アンケートと比較して有意に理解が増していることが示された。

また、価値観の項目においては、「仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある」($t=8.65, df=245, p<.01$) というセクシャルマイノリティを受け入れる価値観について、事後アンケートが事前アンケートと比較して有意に向上していることが示された。

さらに、行動意志の項目においては、「セクシャルマイノリティについて知る必要はあると思う」($t=-7.47, df=249, p<.01$)、「あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい」($t=-3.95, df=245, p<.01$) というセクシャルマイノリティについての学びや差別や偏見をなくすことへの行動意識について、事後アンケートが事前アンケートと比較して有意に向上していることが示された。

4. 考察

4.1. LGBTQ 教育の必要性

LGBTQ 教育の必要性を検証するため、事前アンケートにより、セクシャルマイノリティ

表 8. 中学生に対する LGBTQ 教育の効果の検証

知識		事前	事後	t 検定
		平均値 ± 標準偏差	平均値 ± 標準偏差	
セクシャルマイノリティの人たちの人口は少ないと思う。	1 回目	2.85 ± 0.86	1.55 ± 0.76	**
	2 回目	2.63 ± 0.87	1.64 ± 0.85	**
	全体	2.75 ± 0.87	1.59 ± 0.80	**
性というのは、男性と女性の 2 つだけである。	1 回目	2.46 ± 1.02	1.41 ± 0.75	**
	2 回目	2.06 ± 1.16	1.18 ± 0.55	**
	全体	2.29 ± 1.10	1.31 ± 0.68	**
ゲイ（男性が好きな男性）は、女性になりたいと思っている。	1 回目	1.80 ± 0.93	1.63 ± 0.94	**
	2 回目	1.88 ± 0.92	1.56 ± 0.99	*
	全体	1.84 ± 0.92	1.60 ± 0.96	**
価値観				
仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある。	1 回目	2.08 ± 0.92	1.63 ± 0.71	**
	2 回目	2.00 ± 0.92	1.39 ± 0.63	**
	全体	2.04 ± 0.92	1.53 ± 0.69	**
行動意志				
セクシャルマイノリティについて知る必要はあると思う。	1 回目	3.42 ± 0.65	3.71 ± 0.55	**
	2 回目	3.44 ± 0.83	3.90 ± 0.36	**
	全体	3.43 ± 0.73	3.79 ± 0.49	**
あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい。	1 回目	3.72 ± 0.55	3.82 ± 0.49	**
	2 回目	3.74 ± 0.67	3.95 ± 0.22	**
	全体	3.73 ± 0.60	3.87 ± 0.40	**

*p < 0.05, **p < 0.01

についての理解度や侮辱語の認識について調査を行った結果、中学生の LGBTQ に対する意識については、先行研究が示すように知識の不足や理解の低さが示された。特に、学外においての認識においては、半数が聞いたことがあると回答しているのにもかかわらず、セクシャルマイノリティについての理解においては、「聞いたことがない」、「聞いたことはあるが、具体的に詳しくは知らない」の合計が 7 割を超える結果であり、正確な知識として、そして、カリキュラムとして学ぶ機会のないことによる認識の低さが確認できた。また、情報源においては、テレビやインターネットが多く、書籍や資料などから正確な情報を得ることができていないことも示された。

さらに、セクシャルマイノリティについての認識の低さとは逆に、ホモ、レズ、オカマ、オナベという侮辱語については、8 割を超える生徒が聞いたことがあると回答していた。

これらの言葉については、かつてはメディアなどでの使用があったが、近年は侮辱語として、メディアなどでは使用されることが少ない言葉であるが、このような侮辱語について、生徒の間においては聞きすることが日常的になっていることが示された。

これらを改善するためにも、そして、正確な情報を伝えるためにも LGBTQ 教育を実施することの重要性が示されたと考えることができる。

4.2. LGBTQ 教育の内容の検討

LGBTQ 教育を実施し、授業に関する生徒の印象についてのアンケート調査を実施し、授業内容について検討した。授業実施においては、LGBTQ 当事者を授業者とし、授業冒頭で授業者が当事者であることを伝えることから授業を開始した。授業内容においては、正確な知識を伝えることを目的とした知識教育、当事者のライフストーリーを通して、LGBTQ 当事者の置かれている現状や自分自身の性について考える価値観教育、そして、現代社会における LGBTQ の現状を知る行動意志教育とした。

アンケート結果からは、授業内容について肯定的な意見がほとんどであり、今回実施した LGBTQ 教育が生徒にとって、有意義なものであったと判断することができる。

LGBTQ 当事者が授業者であったことについての直接的なアンケート調査は実施していないが、「今後、セクシャルマイノリティのことを知らない人に出会った時、性の多様性について伝えていきたいと思う。」や「また多様な性に関する授業や話を聞いてみたい。」という問いにおいて、肯定的な意見が 85% を超える回答であったことは、先行研究で示されているように、当事者との出会いによる影響は大きなものであると考えることができる。

4.3. LGBTQ 教育の効果

中学生に対する LGBTQ 当事者による授業の効果について検証したところ、知識、価値観、そして、行動意志の項目において、有意に肯定的な変化を与えられることが示された。知識の項目については、情報を得ることで効果が上がることは自明であるが、価値観（仲の良い友達がセクシャルマイノリティだと知ったら抵抗がある）や行動意志（セクシャルマイノリティについて知る必要はあると思う、あらゆる差別や偏見がなくなるような社会にしていきたい）について有意に向上する効果があることが示されたことは、この研究で実践した授業内容が中学生への LGBTQ 教育において有益なものであることが示されたといえる。また、この効果については、1 回目、2 回目とも確認することができ、効果の再現性も示されている。

日高（2015）の指摘するように、LGBT に関する内容を授業に取り入れることは、85%を超える教員がその必要性を認識しているにもかかわらず、実際に授業に取り入れた割合は14～15%程度であり、教育現場での実践については、実施が遅れていることが示されている。また、実践による効果の検証についても不明確な部分が多く残されている。

この研究で用いた授業実践は、LGBTQ 教育の実践による教育効果を示すことができており、中学校教育においてLGBTQを取り上げた授業実践を実施するための有益な実践例になると考えることができる。

5. まとめ

以上、LGBTQ 教育が中学生に与える効果を明らかにするために、LGBTQ 当事者による授業実践を行い、その効果の検証を行った。中学生の現状としては、LGBTQ に対する正確な知識を持っておらず、また、正確な知識を得るための学習の機会も少ないこと、また、逆に侮辱語についての認識が高いことが示された。このことから、中学生の生活においては、LGBTQ に対する偏見や誤解を抱きやすい環境であること、学ぶ機会がないことに大きな課題があることが示された。

そして、それに対するLGBTQ教育の実践においては、中学生のLGBTQに対する意識が大きく変容することが示されたことは、この研究の大きな意義である。

また、授業の効果については、授業内容の工夫も効果があったということが出来るが、なによりも、LGBTQ 当事者による授業という機会を創出できたことが授業効果をより高めることにつながったと考えることができる。LGBTQ 教育については、学習指導要領への記載がないなど、教育内容については未整備な部分が多く、当事者ではない教師が実践するためには、教材の開発や授業者の研修などの課題があり、その実践が遅れている現状がある。そのため、LGBTQ 教育についての教材の開発と検証、教員への研修が必要である。ただし、中学生の現状からは、LGBTQ に関する教育の必要性が示されており、実践を優先する点から考えると、この研究のようにLGBTQ 当事者による教育実践が一つの解決策になるということができる。

今後については、今回の研究と同じ授業を継続して実施することにより、その効果の検証、そして、授業内容の改善、そして、授業の効果をより精度を上げて検証するためのアンケート項目の修正を行う必要がある。また、授業内容を教材化することにより、LGBTQ 当事者以外の教員による教育実践とその検証を行うことが必要である。また、今回の検証においては、1校の学校を対象としているため、今後は他校での実践を行い、検

証を実施していきたい。

ただし、この研究で実施した LGBTQ 教育は、中学生に対する有益な効果を示すことができおり、また、再現性も検証できていることから、この研究で示されたことは、社会的に必要と言われている LGBTQ 教育の実践を進めることにおいて有益な示唆を提示することができたといえる。

6. 付記

本稿は、日本教育実践学会第 24 回 研究大会における発表「LGBTQ 教育が中学生に与える効果についての研究」に加筆・修正を加えたものである。